

第13回気象学史研究会

「戦前日本におけるベルゲン学派気象学への対応」を開催

気象学史研究連絡会

第13回気象学史研究会「戦前日本におけるベルゲン学派気象学への対応」を日本気象学会2023年度春季大会（オンライン+東京大学）会期にあわせて5月13日（土）に開催した。当研究会では初めて、大会会場以外で現地開催し、前回に続きオンライン中継も行った。会場約15名・オンライン約50名あわせて約65名が参加した（第1図）。

Vilhelm Bjerknes (1862-1951) らベルゲン学派と呼ばれる研究者たちにより展開された気象学は、その低気圧モデルをはじめとして、今日でも気象予報や気象教育の場において強い影響力を保持している。

こうした当時最先端の気象学に対し、独自の気象学を進展させてきた日本の気象界はどのように対応したのか、中央気象台を中心とした気象学者・気象技術官の活動を多くの資料・文献から明らかにしてまとめられた左高豊武氏（元東京大学大学院）は「戦前日本におけるベルゲン学派気象学への対応—中央気象台における対応例：公刊資料を中心に」と題して講演した。戦前の中央気象台におけるベルゲン学派気象学への対応については、慎重・消極的姿勢が強調され、戦後に手法の採用が積極的に進んだという定説が存在していた。実際には、戦前期は不連続線の天気図導入などの積極的動きと批判的な研究発表が並行し、やがて、日本の地域性を重視し局地的な気象変化に注目した不連続線分析の伝統が形作られ、これと欧米流の気団論とが重なり合って展開し、これらの間で多様な議論が存在したこと、戦後はベルゲン学派流の前線分析が積極的に導入されたが、それは、日本独自の不連続線分析との相違を明確化して前線分析へと転換させる作業であったことを示した。

気象庁の予報現場で長く天気図解析に携わられた

永澤義嗣氏は「わが国の天気図に見る大気理解の発達史」と題して、日本の天気図における解析の歴史を振り返り、気象学の理論がどのように現場での天気図解析・大気理解に反映されてきたのか講演した。1883(明治16)年にわが国で最初に天気図が作られてから最近までの天気図に目を通し、140年間を九つの期間に分けて特徴を示した。1921年の藤原咲平のベルゲン留学後に始まった不連続線の記入は、温帯低気圧の構造的な特徴として解析する視点が希薄であったことを示し、ベルゲン学派気象学に基づいた前線解析が定着したのはようやく1970年代になってからとみられると結論した。

講演後の質疑応答も活発に行われ、日本の気象界が国際的な気象学の展開に対応しつつ、自らの気象解析

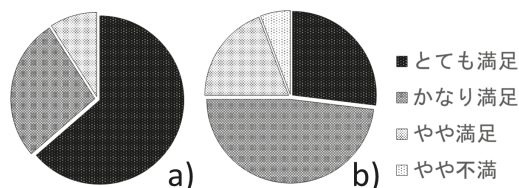


第1図 第13回気象学史研究会「戦前日本におけるベルゲン学派気象学への対応」(2013年5月13日・SOBIZGATES(東京都新宿区)D会議室)にて講演された左高豊武氏(a)と永澤義嗣氏(b)。(c)今回初めて大会会場外での開催であったが多くの参加者があり、オンライン中継にも多数の参加があった。

技術・現象理解をいかに発展させようとしてきたのか、理解を深めることができた。両講演ともジャーナル等の公刊資料、天気図などの多くの資料にそれぞれ文献研究、天気図解析の視点から丹念に当たって歴史的事実を記述することにより従来の「定説」を排し、今後の歴史研究の土台となる内容を示された。このテーマに関してさらに多様な視点からの議論がさまざまな場で続けられることを期待したい。

今回、春季大会の一般講演はすべてオンラインで実施されたが、本研究会は初めて独自に民間施設を確保して、前回に続いて会場開催とし、オンライン中継も行う形で実施した。会場開催の長所は活かしつつ、会場への参加が難しい方にも多数で参加いただけたことはよかったが、運営上は、特にオンライン中継において円滑な質疑応答がしづらく、会場の質疑応答の音声聞き取りにくく、講演の音声が長時間途切れるなどといった多くの問題が発生した。会場参加者とオンライン中継参加者の満足度が大きく異なることもそれを反映している(第2図)。アンケートでは多くのご意見をいただいております。限られた資源の中ですべて対応するには困難もあるが、今後さらに改善していきたい。

アンケートは参加された方のほかに、参加できなかった・されなかった方も対象に実施している。毎回後者の方々から前者の2倍近い回答をいただいている。もちろん後者の方が、母数が圧倒的に多いからといえばそれまでであるが、当研究会に興味関心を持ちながら参加できなかった方が多く回答くださっていると思われる。会場まで行くのが難しい方、オンラインにしても都合の良い時間帯はそれぞれである。特に参加できなかった方から要望の多い講演動画の公開は、ご講演者のご理解ご協力を得て今回も実施することができ、多くの方にご覧いただいているが、こうした方々を含めた議論の場を広げていくことが課題である。



第2図 第13回気象学史研究会参加者アンケート設問「今回の研究会について、あなたの満足度をおうかがいます」に対する会場参加者(a)とオンライン中継参加者(b)の回答の集計。アンケートは研究会参加申込者・気象学会メーリングリスト、気象学史メーリングリストで周知してウェブ上で行った。実施期間は2023年5月13日から5月22日まで。回答数は会場参加11(回答数対参加数比73%)、オンライン中継参加41(同84%)である。

今回は要望があり、ウェブ会議ツール Zoom の練習会(気象学史研究連絡会ほか 2021)を開催した。興味を持っていただいた方に少しでも多く参加いただけるよう、今後も丁寧に対応していきたい。

最後に、ご講演いただいた左高氏・永澤氏、前回に続きボランティアとして運営にご協力くださった遠藤正智氏・岸 誠之助氏(順不同)の各位に厚く御礼申し上げます。本研究会の開催にあたり日本科学史学会関東支部からご後援をいただいた。日本気象学会講演企画委員会および日本気象学会2023年度春季大会実行委員会から多くの支援を受けた。深く感謝申し上げます。本研究会の開催にあたっては気象学会の研究連絡会等活動補助金の支給を受けた。

参考文献

気象学史研究連絡会、遠藤正智、岸 誠之助、2021：第7回気象学史研究会「『天気予報の自由化』25年—気象行政史の視点から」をオンライン開催。天気, 68, 533-535。